

## 至誠の人 吉田松陰 (二)

講師 一龍斎貞花

華やかな内掛け姿のお文のポスター

が、NHK放送センター内各所に貼つてあり、「花燃ゆ」のPRにつとめて

なっていた男。入江九一―禁門の変で自害。温厚篤

し。

桂小五郎、のちの木戸孝允も、三歳

「君の志は、なんですか」  
「志を立てて以て万事の源と為す」  
「君の志は、なんですか」  
「志を立てて以て万事の源と為す」

いる。これまで武士の妻というより、

●その他の主な弟子たち

上の松陰を兄と慕い、弟子の一人とい

町娘のような雰囲気から、毛利家の奥

伊藤俊輔―初代総理大臣、伊藤博文。

前。松陰が江戸遊学から脱藩して東北

女中に変身。以前の篤姫のような人気

山県狂介―第三・九代総理大臣、山

遊歴、藩邸に自首して萩に帰され、寅

が出ますかどうか。視聴率にも注目。

県有朋。

次郎から松陰の号を使用した頃の嘉永

### 松陰の弟子

品川弥二郎―長州藩倒幕派の一人。

五年(一八五二)、桂は江戸に出ているので、二人のふれあいはわずかだったろう。小五郎はのちに大村益次郎ら

### 松陰の弟子

戊辰戦争には奥羽鎮撫総督参謀。

と長州軍制を改革。坂本竜馬の斡旋に

松下村塾で、松陰の薫陶を受けた弟子

山田顕義―陸軍中将。歴代内閣で司

法相。日本法律学校(のちの日大)創立。

子たちを、紹介しよう。

八畳と十畳半の二間だけの平屋、松

より、西郷隆盛、大久保利通らと薩長

### ●吉田松陰門下の四天王

久坂玄端―文の夫。松陰亡き後のリ

連合を結び、王政復古後、西郷、大久

### ―ダー、光明寺党結成。

高杉晋作―奇兵隊結成。功山寺決起。

保と共に維新の三功臣といわれる。

吉田松陰―生きていれば総理大臣に

導がいかにか素晴らしかったかといえま

に大きな志を持たせたのですから、す

### ―ダー、光明寺党結成。

高杉晋作―奇兵隊結成。功山寺決起。

老井伊直弼が独断で調印。

吉田松陰―生きていれば総理大臣に

導がいかにか素晴らしかったかといえま

老中間部詮勝暗殺計画を立案。

吉田松陰―生きていれば総理大臣に

導がいかにか素晴らしかったかといえま

老中間部詮勝暗殺計画を立案。

老中間部詮勝暗殺計画を立案。

しかし、実行に移す前に、藩の守旧派が松陰の行動を警戒し、再び野山獄へ。

江戸にいた久坂や高杉が、一刻も早く討てと指示する松陰に

「行動実行はむつかしいし、藩に悪影響を及ぼしかねないから時勢を見て下さい」と、諫言するも

「僕は正義するつもり、国家に節を守って死ぬ者の無いこと、幾重にも幾重にも残念」、「今こそ草莽崛起の時」、「今こそ狂う時」と、弟子に決起を迫ります。

「知行合一」、知は実践を伴わなければならない、有言実行あるのみという松陰。

### 松陰死罪

遂に幕府から、安政の大獄で松陰を差し出せと命ぜられ、護衛三十名という物々しきで江戸へ護送され取り調べ。尊王攘夷を唱えて奔走する梅田雲浜と共謀していたかどうか。御所へ落し文、投書していたかどうかという些細なもので「していません」と答えれば、重

罪にならなかつたでしょうが

「今、日本が直面している危機に対して、幕府はどうあるべきか、幕府はどう考えているか」一心不乱に自説を述べ、間部詮勝襲撃計画をしゃべってしまった。

体制側からみれば、テロをけしかけている張本人ということになります。

過激な危険人物、老中暗殺計画は、死罪に値する罪と決定。

「死して不朽の見込みならば、いつでも死ぬべし。生きて大業の見込みあらば、いつでも生くべし」

処刑を目前に控えた獄中でしたためた遺書、「留魂録」の中の言葉。

「志のためにはいつでも死ぬるし、見込があるなら生きよう」と、真情を書いています。

「オレは会社のために命を投げ出す」なんて豪語している人が、いざ会社がおかしいというと、一番にやめる、そんな社員いますでしょ、違いです。

安政六年（一八五九）十月二十七日、

松陰は、従容として処刑の場に臨み「吾れ、今、国のために死す」と語り、「ご苦労様」と会釈して正座し、その堂々たる態度に役人達は感嘆したと申しま

す。「身はたとひ、武蔵の野辺に朽ちぬとも、とどめおかまし大物魂」

享年三十歳、伝馬町の牢屋跡に碑が建てられ、世田谷の松陰神社にお墓がごさいます。

翌年、桜田門外にて井伊大老が暗殺され、いよいよ風雲急を告げ、松陰が処刑されたことにより、ニューリーダ―久坂玄端の呼びかけで松陰の志を継ぐ者で「一燈銭申し合せ」という光明寺党結成。

高杉晋作、中谷正亮、品川弥二郎、山県狂介、伊藤利助、入江九一、前原一誠、桂小五郎、前田孫右衛門ら、心ひとつに一致団結。師松陰の死が若者たちの心を躍らせたのです。

久坂は、高杉と共に品川御殿山の英国公使館焼き討ち。

文久三年、尊王攘夷運動は絶頂期を迎へ、肥後、長州、水戸、対馬、津和野などの志士が集結。

五月、下関で外国船を砲撃、しかし決行したのは長州藩のみ。

攘夷派の過激な行動が、公武合体派の薩摩、会津などが反発し朝廷内の攘夷派は一掃され、長州藩士は京都を追われ、三条実美ら長州へ七卿落ち。

新撰組が池田屋を襲撃し、吉田稔麿、宮部鼎蔵はじめ同志が斬り死。

長州藩の冤罪を訴えるため嘆願書を差し出すも受け入れられず、されば武力でと、遂に蛤御門の戦いとなり、薩摩、会津、桑名軍に敗れ、重傷を負った玄端は、妻の文に心を残し自刃。

若者たちは、師の心を継いで立ち上がり、死んでいったのでございます。■